

機鋒

第3号
2012年5月
桃源院発行
日野市旭が丘1-10-4
電話 0425-83-1133
Fax 0425-83-1134



山 人を見 人を見

大智祖繼

元禄甲戌七年(1690)刊の『大智偈頌』に蠅の頭のような小さな片カナを主体に漢字を交えた語釈文をびっしりと書きこんだ書写帖、この書は、曹洞宗の子弟必携のもので、経典と同じく暗誦させられてきた永平六代の祖、大智祖繼(290-1366)の偈頌集二百二十九篇であり。この刊本に書きこまれた語釈は、あの良寛さんの手になるものである。

大智禅師、山居の偈頌の中から一篇だけを読んでみたい。

この一篇は禅師が加賀の吉野郷に祇陀寺を開かれて十年になろうとする頃、この寺を弟子にゆずって瓢然として故郷の肥後(肥後)に帰り、菊池郡穴郷村の鳳儀山に聖護寺(現在の熊本県菊池市斑蛇口)という小さい寺を建てて山居された頃の作である。禅師はここに二十年間も住まわれた。四十七、八歳から六十七、八歳頃までで、この山居中の作が八編あり、ここに掲げるものはそのうちの一つである。

万像の中独露身
更に何れの処に於いてか根塵を著けん
首を回らして独り枯藤に倚つて立てば
人 山を見、山 人を見る

万像之中独露身
更砂何処著根塵
回首独倚枯藤立
人見山兮山见人

首をめぐらして遠近の山々を見渡す。山々は刷毛で刷いた淡彩の画のように

禅の偈頌 こころのゆくえ

万像の中 独露身

けむり、その山ひだに白雲が静かにしずかに立ちわたる。私はただ一人、杖を手にして立つ。すると私の脚下から白雲が湧きあがって、私もまた画の中に入る。疑うらくは私が山を見ているのだらうか、山が私を見ているのであろうか。私が山を見ると、山はこれに應えて親しく私を見る。ああ、この感應道交の不思議さよ。思えばこの身は森羅万象の中にすつくと立つて全体露現、独立無伴、天上天下ただ一人、最尊最貴の真人人体であるのだ。塵埃の付着するところは何処にもない。わ

れも然り、山もまた然り。さればこそ山と人とのこの感應道交があるのだ。われ語れば山応え、山語ればわれ応える。奇なるかな、奇なるかな、鳳儀山中黒衣の人。

いまの世の人が「自然」と呼んでいるものは、自分の向う側に横たわる客観世界である。人が山を見、人が山に登り、人が山を描き、人が山を測量する。人から山への一方通行である。山は何もしない。何もしないで横たわっている対象にすぎない。この一方通行が、やがて山を死んだものにするのである。

東洋、とくに日本では、もともとはそうでなかった。人々は月と話をかわすことができた。草

や花と語り合うこともできた。人と自然とは一方通行でなく、たがいに感應したものである。古代のインドも支那も日本もそうであった。それは近代になるまで人々の生き方の中にも歌にも昔話にも引きつがれてきた。

ところが消費文明が、怒濤のように襲ってきて猛威を振うと、人が山を見るだけの世界になり、人が山を切りくずし、人が山を征服することになった。かくして山は死んだのである。死んだものはもう煮て食おうと、焼いて食おうと勝手である。これを大がかりで押し進めた。その威力は大へんなもので、

その一方通行のできる国を「先進国」といい、そのできない国を「後進国」と呼ぶようになった。このごろでは、「後進国」も、これではならないというので「発展途上国」になりつつある。

けれどもこの大がかりな一方通行の文明にも、いまや年貢の納めどきが来た。地球温暖化で生きられなくなってきたのだ。ここらで人々は「首をめぐらして」方向転換しなくてはならない。人が山を見るだけではダメなのだ。山が人を見らという失われた東洋思想の道への回帰が、もはや一刻の猶予も許されないほどの急務になってきた。

けれども、その回帰のためには唐の長慶禅師以来参究しつづけられてきた「万像の中 独露身」の体得が先駆しなくてはならない。すべてのあらゆるものがわれと同根一体で、その天地一杯のわれが一本しゃんと立たないことには、自然との真の和解は成り立たないということである。

この偈に「更に何れの処に於いてか根塵を著けん」とある。自然と継ぎ目のない我が一本しゃんと立つということとは、天地同根、万物は我と一体ということだから、卑小な人間の五官だけに引きずられ、五官の快楽とエゴのために迷いと災害と異常気



象をみずから招くことはあり得ないという意味である。

悲しいかな、古人の詩ただ一つを味わうにも、このような前置きが必要に



なったのである。いまの世の私らは、大智禪師の見られた山を、夢にも見る事ができないのだ。

人の脚下に雲が湧かない。雲をおこす想像力がないので、山の語る言葉を受けとるセンスもない。のみならず汚染された山は、もはや何も語ろうとはしなくなった。

むかしは人間世界に絶望しても、自殺しないで生きられた。人々は山に入つて草の庵を結び、月と語らい、山と親しく感応し、花や鳥を友にすることができたからである。日本の中世文学はそのなかから多くの傑作を生んでゐる。西行も芭蕉も長明も兼好もそうであり、わが大智禪師の偉大な詩の世界もそうである。

ただ大智禪師は中世の文人とちがつて厭世ということがない。「独り」ということは、世の常の厭世を通り越したもので、全く質のちがったものであつ

た。それは自己に徹し、自己になり切つて、一切衆生に慈悲を行ずる自己の独立独歩だったのである。

香炉の灰入れ法

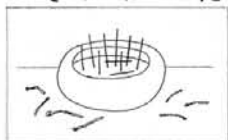
お仏壇で一番厄介なのが香炉のお手入れです。

毎日お線香を焚いていますと、線香の燃え残りや、ときにはマッチ棒などがさつたまま残ります。そして、次第に灰も固くなり、お線香がたちません。

小学生の頃、寺の香炉の掃除をするのが私の役目でした。新聞紙を広げ、篩ふるいに少しずつ灰をいれ、ふるって行きます。昔は線香の質も悪かたものですから、線香の燃え残りがよく残りました。

風で舞い上がる線香の灰を吸い込みながら、一生懸命に香炉灰をふるったものです。ところが、年齢が上がるにつれ、この仕事は厭になり、中学生の頃にはいやいやがりました。(汗)

ここで簡単な方法を記します。その方法は固まった灰を箸(割り箸でも金箸でも長い棒でもいいです)でかき混ぜる。そして、香炉に残った燃えカスをつまみ出す。灰が柔らかくふわふわしたら、終了。時間があれば、スフーンのようなもので表面を平らにならします。



アップル ステイプ。ジョ ブズと北アメリカ禪

2012年度総会・講演会報告 講演会抄録

前・北アメリカ国際布教総監

秋葉玄吾 師

私は渡米して二十四年になります。1987年(昭和六十二年)七月、カリフォルニア州のオークランドに禪のグループがあり、そこに北アメリカ開教師として任命され赴任しました。私が渡米するキツカケは、知野(弘文)老師と関係があります。私は自分がまだ永平寺の雲水であつた1981年(昭和五十六年)二月下旬に、八日間ほどサンフランシスコ市に滞在しております。それが初めてのアメリカでした。サンフランシスコ禪センターの摂心に一週間参加しました。その摂心に私を連れて行ってくれたのが、知野老師のお弟子さんでした。彼は永平寺で二年間修行して、アメリカへ帰国するときに私を誘ってくれました。「アメリカで摂心があるのだが、玄吾さん一緒に行きませんか」と言うので、私も「アメリカで坐禅か」と気軽に返事をしました。実は、観光にでも連れて行ってくれるのかなと思っておりました。ところが、サンフランシスコ禪センターに入ったら、一週間の間ずっと坐ったきりです。そんな摂心でした。その折に、ロスアルトスにあった知野老師のハイク禪堂

も訪ねたのでした。そこで初めて知野老師に出会いました。この時、知野老師は開教師活動十年目、63歳の脂の乗った独り立ちの布教をされていました。ガレージを改造したという板敷の禪堂で、坐禅をし、二十人前後の、こざつぱりした感じの、三十〜四十歳代のアメリカ人男女が坐っていました。ハイク禪堂の「ハイク」は、五・七・五の俳句のことです。二十人前後しか坐れない小さな禪堂だったので、ハイク禪堂と名付けたのだと聞いております。この時のサンフランシスコ禪センターでの摂心参加がきっかけで、後年私は開教師として渡米することになったのです。その年ステイプ・ジョブズ氏は二十六歳、すでにステイプ・ウオズニアクから天才的なエンジニアとアップル社を起こし、若くして「ビジネスを大きく変えた男」とレビュー誌にも取り上げられる、億万長者の事業家でした。あの日のハイク禪堂に彼がいたかどうかは知る由もありません。私は一介の雲水でありましたから。ここで、知野老師の経歴に月を通してみますと、知野老師は1938年(昭和十三年)、新潟県生まれ。駒沢大学を経て京都大学の哲学科修士号を取得されました。ご本人から伺ったところによると、「お釈迦様のことを歴史的にきちっと知りたい、その教えは本当にどうということなのか理解したい」ということで、本がたくさんあつた京都大学を選んだということでした。指導教授は長尾雅人博士でした。そこで本を山ほど読んだということです。「本をいくら読ん

でもわからない。やはり坐禅をしなればいけない」ということで、その後、永平寺で二年間修行されました。永平寺には摂心の時に独参というものがありません。当時、故宮崎亦保禅師が後堂担当の老師でした。「その独参の時に、初めて自分の頭の中が溶けていくような感動を覚え、涙を流した」とおっしゃっております。後年、宮崎禅師は「北アメリカに知野というのがあるが、元気にしているか」とよく私に尋ねられました。そして、サンフランシスコ禅センターを開かれた鈴木俊隆老師の招聘に応じ、知野老師は1967年(昭和四十二年)北アメリカ開教師として渡米、サンフランシスコ禅センター、タサハラなどで、僧堂生活の様々なことを初期のアメリカの曹洞禅の修行者に指導されました。ハイク禅堂、サンタクルーズ禅堂なども鈴木老師の指示で出向いていました。二年程して知野老師は帰国しましたが、知野老師の人柄に惹かれたメンバー達が、知野老師の父である、お師僧さんに手紙を書き、「知野老師をハイク禅堂に送り出して欲しい」と訴えたのです。お師僧さんは知野老師に「お前行きたいか?と聞いたそうです。「はい、行ってみたいです」と答えると、お師僧さんは「適材適所だな」と言い、アメリカ行きを許されたそうです。お母さんも隣で「お寺に住職は二人もいらぬ。行ったらつしやい」と言って送り出してくれたと述懐しております。1970年(昭和四十五年)二月、知野老師はロスアルトスの禅堂に赴任されました。その後、1980

年(昭和五十五年)サンタクルーズ山脈の山中に慈光寺を開創、1984年(昭和五十九年)にはニューメキシコ北部、ロッキーマウンテンの山地に鳳光寺を開創され、多くのメンバー、修行者を育てたのです。また、チベット仏教のリンポチェがコロラド州の山中に、チベット仏教研究所としてナロパ大学を設立する手助けなどとして、そこで禅仏教、書道などの指導も行っていました。弟子や信者はヨーロッパにもいて、2002年(平成十四年)スイスの山中の弟子の処にバケーションで訪ね、休養中に遷化(亡くなる)されました。遷化から一カ月程してサンタクルーズ山脈の山中にある閑静な慈光寺で、知野老師の葬儀が執り行われました。式は泉の湧く池の畔で、かつて知野老師が散策したであろう、その場所で行われました。私は北アメリカ総監の役職中でもあり、その乗矩(在家の葬儀の導師)を勤めさせていただきました。アメリカで初めて会った開教師が知野老師であり、後年、その葬儀の乗矩を取るとは夢にも思いませんでした。不思議な縁だと感慨深いものがありました。その葬儀にステイブ・ジョブズの奥さんが参列していたのを知ったのは数年後のことでした。

ここで、アメリカにおいて曹洞禅がどのように展開していたのか、その歴史を垣間見たいと思います。北アメリカでの布教はさかのぼること九十年になりますが、禅ブームが起こったのは1960年代になります。この頃の

アメリカは「混迷の60年代」と呼ばれています。冷戦構造から生まれたベトナム戦争の狂気は若い人を蝕みまし。世界の富を一国に集めたような繁栄、偽善的な価値観、空虚さなどを忌避し、革新的な生活スタイル、精神文化を創造しようともがく若い世代、ピートジェネレーションと呼ばれる一群が産まれました。ヒッピームーブメントなども起こりました。それまでも鈴木大拙師の著作などで禅は知られてはおりました。そしてこの時代、カリフォルニア大学バークレー校で東洋哲学の講座をもっていたアラン・ワッツが「禅」を講義していたこともあり、特にカウンターカルチャーに興味を持つ人達に、禅メデイテーションは広まっていきました。禅の公案に登場する禅者たちの反権威主義的な自由さ、孤高、高潔、ラジカル、独立独歩、いきいきとした生き様、意外さ、直感的な鋭さ、単純な生活、簡潔明快な言葉など、ピート・ヒッピーの若者達の創造性を刺激したのでしよう。一大禅ブームが起こりました。いわゆるビート禅です。詩人のケーリー・スナイダーは道元禅師の『山水経』の巻を読み、「道元はエコロジストだ、自然の働きに対して深く際だった洞察を有していた二人の思想家としてみることもできる」と敬服しています。1956年(昭和三十一年)前角博雄師が禅宗寺(ロサンジェルス)へ、1959年(昭和三十四年)五十六歳であった鈴木俊隆師が桑港寺(サンフランシスコ)に赴任し、参禅活動が行われるようになりました。1960



年(昭和三十五年)には山田霊林師が第五代開教総監として禅宗寺に着かれまし。山田総監は後に、永平寺七十五世貫首となられております。山田総監は着任後すぐ「禅仏教昂揚研修所」を設立、曹洞宗の只管打坐、修証一如の禅の布教を展開する方針を定めました。日本から若い開教師を所員として招聘しており、その中に片桐大忍老師もおりました。当時、「日系寺院で坐禅会を開き、白人の参禅者が寺に出入りする」という状態は日系一世メンバーには心よくない光景と映りました。戦中戦後の日系人は、大変つらい社会状況の中にありましたが、「お寺は同朋の人達が集いにくる唯一の場所」であつたからです。しかし、アメリカ社会の中にある寺という条件を考慮に入れ、日系人の将来を見据えたとき、アメリカ人一般がメンバーに加わるほうが寺院の維持のために有益であり、禅

の布教にとつても重要であるとの判断だったと思います。当時は道元禪師、瑩山禪師の著作の翻訳もほとんどなく、その教えを紹介するために大変な努力を開教師はしました。開教師は自分の修行を通して曹洞禪の教えの実例を示さなければなりません。開教師は日常的に行じる坐禅を在家信者にも解放し、講義、提唱、作務、学習、そして摂心を含む厳格な修行の仕方を



一番右が知野弘文老師

確立していきました。僧侶も陸続と生まれました。70年代は禅センターが活動的に力強く拡大していきます。開教師の弟子たちが各地に禅センターを開き、何千人もの修行者がアメリカの禅文化に参加し、語録、經典の翻訳、偈文翻訳、袈裟、絡子、作務衣、着物など衣類の縫い方、進退、所作、鳴らし物などの習得が進んだのです。現在、

北アメリカには約四百人の僧侶、二百五十以上の禅センターがあり、アメリカの曹洞禪が形成されつつある状況に至っています。仏教がもつ宇宙観、世界観の豊穡さ、深さ、宇宙にあるありとあらゆるものの一体感、個物への限りない慈悲の念、それら仏教の精華がアメリカ人への心の糧として広まっていると思います。

さて、話をステイブ・ジョブズ氏に移します。ジョブズ氏は1955年(昭和三十年)二月二十四日に生まれています。両親は学生であり、特に母親の親の反対もあったため、生まれるとすぐに養子に出されました。ジョブズ氏は後年まで、「捨てられた、選ばれた、特別な」という意識を持っています。養子先で隣の女の子と遊んでいた、「お父さんお母さんは、あなたを必要としなかったのね」と言われ、衝撃を受け、泣いて家に帰り、お父さんお母さんに「僕はこういう子なの」と聞きました。両親に「お前は、私達を選んだんだよ。私達にとつて、特別な子どもなんだよ」と何度も言われて、気が収まったということもありました。そのため、二十歳前後の悩み多き青年時に、そのような思いが吹き出してきて、放浪するということになったようです。高校に入つて、ジョブズ青年は年六十代の影響を受け、マリファナやLSDとかカウンターカルチャー系のトリップに興味を抱きました。そして、同じ高校出身の五歳先輩の天才的な「電気少年」、後にアップルを作り出す、ステイブ・ウォズニアックと知り合いま

した。二人のステイブは性格が反対で、一方は激しく、外へ向かい、一方は静かで、内に向かう性格でした。1972年(昭和四十七年)ステイブ・ジョブズは二歳、オレゴン州にあるリード大学に入りました。自由を重んじる校風とヒッピー的なライフスタイルで知られている大学でした。ジョブズは大学に入つて、精神世界、悟りに関する様々な本、パパ・ラムダスの「ピー・ヒア・ナウ」、鈴木俊隆師の『禅マインド、ビギナーズマインド』、リチャード・モーリス・バックの『宇宙意識』など当時ヒッピーの聖書といわれたものを図書館に通い読んでいました。もうひとつ、フランシス・ムア・ラッペの『小さな惑星の緑の食卓：現代人のライフスタイルを変える新食物読本』という本が、大学一年生のジョブズに大きすぎる影響を与えました。とにかくこの頃、菜食主義に禅、坐禅にスピリチュアリティ、LSDにロック：当時の大学キャンパスで流行っていた悟性を求めるサブカルチャーの象徴となっていた様々なものが、ジョブズの中で一つに混じり合っていたのです。ジョブズは、「両親が一生かけて貯めたお金」を学費で費い、おもしろくもない講義を受けるのが嫌だったと、十八カ月大学で過ごした後、1974年(昭和四十九年)二月、ロスアルトスの実家に戻ります。十八歳でした。そして、インド放浪へ出ます。「僕にとっては真剣な探求の旅だった。僕は悟りという考え方に心酔し、自分はどういう人間なのか、何をすべきなのか、知り

たいと思ったんだ」と彼は目的を語っています。インド放浪により、東洋の自己と西洋の自己とは違うところがあると自覚しました。しかし、インドを放浪して、赤痢になったり、金欠になったり、苦行や質素を体験しても、悟りも師も見いだせなかった。七カ月のインドの田舎を放浪し、ロスアルトスに戻っています。十九歳という多感な青年ステイブは、人間的に成長しようともがき、自分が養子に出されたこと、生みの親を知らない、心の痛みを受け、自分は何者なのか、と自分探しを続けます。そして禅に大きな影響を受けるようになり、永平寺に行こうと考えたこともありました。しかし、こちらにとまれと師に言われてやめたそうです。「ここにはないものは向こうにもないから」と。実際、師はすぐ近くにいたのです。ロスアルトスのハイク禅堂でほえんでいる知野弘文老師でした。ジョブズは正師(まことの師)に出会ったのです。1975年(昭和五十年)、ジョブズ十九歳、知野老師三十七歳の邂逅でありました。知野老師はハイク禅堂の開教師として五年目に入り、盛んな活動を展開している時期でした。ハイク禅堂の勤めの他、サンフランシスコ禅センター、タサハラをサポート、スタンフォード大学やカリフォルニア州立大学サンタクルーズ校、社会人コースでの禅仏教講演、各地の禅グループへの指導など、禅僧として充実した活動期に入っていました。ジョブズは知野老師に出会い熱心に曹洞禪を学んでいくようになり、「知野弘文老

師との出会いに深く感動し、気がついてから、なるべく長い時間を彼と過ごすようになっていた」と述べています。私はジョブズのこの言葉に知野老師の面目躍如たる家風があると感じ取ります。多くを語らず、柔和に人を包み込んでいく慈愛、知野老師の特性のひとつです。そしてジョブズは、「老師にはスタンフォード大学で看護婦をしている奥さんとふたりの子どもがいてね。奥さんは夜勤だったので、僕はいつも夕方から師のところへ行っていたな。で夜中に帰ってきた奥さんに追い出されるわけさ」と語っています。ジョブズは心を開いて知野老師と接し、個人的な苦しみについて語ったこともあったでしょう。曹洞禅の正しい修行とは何か、正しい坐禅とは何か、悟りとは何か、そして、修行そのものが悟りなのだ、悟りは自己の内にある、自己は即ち仏性なのだ、坐禅の姿が悟りなのだ、といった曹洞禅の特徴を知っている、心に納得する安心を得ていたのだでしょう。ジョブズ氏は「出家の相談もしたが、弘文老師からは、事業の世界で仕事をしつつ、スピリチュアルな世界とつながりを保つことは可能なのだから、出家はやめたほうがよい」と諭されています。ジョブズのリード大学時代の時の友人もハイク禅堂に通っていました。その友人も、弘文老師はおもしろい人物だったと言っています。「彼の英語はひどいものでした。俳句みたいに詩的で、何かを暗示するような言葉を断片的に話すのです。そのため、坐つて話を聞いていても、半分ぐ

らしい何を言っているのか判りませんでした。それでも結構楽しんでいました。」というように評しています。開教師は經典や語録をかみくだいて、英語で話す、大変な労苦を背負っています。まして、仏教については白紙の人々です。こちらが当たり前と思うことも、先方はチンプンカンプンというのはしよっちゅうあります。知野老師も密かに悪戦苦闘されたのだと思います。また別の友人は、当時のハイク禅堂をこう振り返っています。「みんなで弘文老師の坐禅会に行きました。私たちは坐蒲



に坐り、上座に老師が坐っていました。あそこでは、心を乱すものを締め出す方法を学びました。とても不思議な経験でした。雨が降っていた日には、そういう環境音を利用して、坐禅に集中する方法なども教えて貰いました」と、様々の人がハイク禅堂で坐禅をし、知野老師のユーモア、優しさ、真面目さ、誠実さに触れ、曹洞禅の教えを学んだのです。ジョブズは、知野老師がタサハラ禅マウンテンセンターで指導するときは、必ず参加するようになりました。タサハラは山間深い谷間の底にあり、川が流れ、温泉も湧く、絶好の場所にある道場です。若いジョブズは他の参禅者にまじり、坐禅や作務に励んだことでしょう。ジョブズは僧堂生活の合理的な規則性、簡潔な日常性こそ、仏の道だと気付いたのではないかと思います。知野老師とジョブズの関係は、その後も深く長く続き、十七年後（知野老師五十四歳、ジョブズ三十六歳）には、ヨセミテで行われたジョブズの結婚式を知野老師が式師として執り行いました。1976年（昭和五十一年）ジョブズとウオズニアックは「アップル」を立ち上げ、パーソナルコンピュータという産業を興していった。この歴史的偉業はウオズニアックの業績であり、ウオズニアックのマシンを中心に会社を興したのはジョブズです。ウオズニアックは生みの母、ジョブズは会社を興した父といえます。この関係は、ソニーの井深大氏と盛田昭夫氏の関係に似ていると思います。この後、アップルは一躍時代の先端をいく会社として

注目を集めました。アメリカの禅の実践者のひとつの特徴として、禅仏教への取り組み方も、現代の総合的な知の習を振るい、禅の思想を解剖し、取れるものはとって生かし、実践して行くということがあります。仏教の教えを禅はどう実践していくのか、自己の身の上はどう実現していくのか、それを重視しますが、この仏の道を、現実の日常生活上、実際に歩むということが、意外と難題なのです。身と口と心に三法印を仏の印を標して、仏の道を現成して生きる、それが個々人の最大の課題であります。ステイブ・ジョブズ氏は、新しい億烈なコンピュータ・ビジネス社会にあつて、仏道という大道を堂々と歩んだ人と呼んでもよいのではないかと思います。このお話を閉じるにあたって、知野老師とステイブ・ジョブズ氏の鎮魂のメモリーのために次のエピソードを献げたいと思います。「非思量の坐禅」といった中国の薬山禅師のエピソードです。誰でもが非思量の自己です、誰でもがたとえ一時の坐禅の姿になれば、それは非思量以外の坐禅ではあり得ないのです。このエピソードは、普段、日常、行住坐臥そのままが非思量であることを示した話です。今でいう寺の事務長が、久しく説法台に登らないでいた薬山惟儼禪師（七四五〜八二八）禪師は、石頭希遷大師の法嗣であり、雲巖曇晟禪師や道吾円智禪師の師である、そして雲巖禪師から曹洞宗の高祖である洞山良价禪師が出た」に聞いた。「修行者たち

は禅師様のご法話を心待ちにしております」。葉山禅師は「判った、修行僧を集める鐘を打ちなさい」と承諾した。修行僧は、「おお、禅師様のお話が聞ける」と期待して集まった。禅師は修行僧が待っている講堂に現れ、説法台に登った。暫く黙ったまま坐っていた。そして、一言も発せず台を降り、方丈の間に帰ってしまった。事務長はあわてて禅師を追ひ、方丈の間で聞いた。「先刻は修行者たちのために説法しようとおっしゃりましたが、何故、一言もお話にならなかったのですか？」。禅師は答えた。「お経を解説、研究する学者もいる。仏教倫理を解釈し論ずる研究家もいる。説法は彼らに任せられるわしは、この通りだ。

『従容録』からの抽出です。葉山古仏は、自己をとりまく生命あるもの、無機物すべての形あるものの説法を聞く耳をもち、眼を持ち、眉毛を備えておられたのでしょう。「休迹なる悟迹を長長出ならしめた」（『そこ』を大きく脱け出していった）全き個の自己が環境とともに生活をされていたのです。知野老師もジョブズ氏も、尽十方世界での明珠となつて今も坐禅をされていることでしょう。

平成24年度春彼岸合同供養会のご案内

新春を迎へ、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

今年も春彼岸合同供養会を下記日程にてご案内いたします。同封の申込用紙にご記入の上、3月9日(金)までに郵送かファックスにてお申し込み下さい。



	第1部	第2部	第3部
3月17日(土)	10時	12時	14時
3月18日(日)	10時	12時	14時

供養料 1霊につき1万円
(戒名・俗名・先祖代々)

塔婆料 1本につき2千円

- ☐ 桃源院駐車場は満車が予想されます。当日は、各法要開式30分前から豊田駅北口より送迎バスを運行いたします。どうぞご利用下さい。
- ☐ 10時、12時の部は大変混み合います。お時間にゆとりのある方は14時の部にご参加下さい。お説教 御誦歌 簡単なお食事・お抹茶・お菓子もございますのでお誘い合わせの上お参りください。
- ☐ 『欠席供養』
当日欠席にての供養をご希望される方は、申し込み用紙に「欠席」とご記入の上、お手数ですが現金書留にてお申し込み下さい。ご供養の上「供養記念品」をお送りします。

本院 本堂建築事業発願文

平成二十三年三月十一日の「東日本大震災」において、震災に遭った地域の被害は惨憺たる状況であります。当桃源院においても、檀信徒の皆様のお墓の石塔等のほとんどが倒壊いたしました。境内では参道の左右の擁壁の損傷と路面の陥没、庫裡裏の崖の崩落、山門横の萬壽塔の崩落、そして本堂は甚大な損傷を受けました。この本堂はおよそ二百五十年の歴史を刻んでまいりました。江戸から明治の廃藩置県、日清・日露戦争、太平洋戦争を経てきております。また一九六二年、一九九六年、二〇〇三年と起きた大きな宮城県北部での地震で受けた屋根瓦等の損害の補修を続けてまいりました。また老朽化が進んだため、内外部に大幅な補修を加えて参りましたが、努力もむなしく年々修繕維持費が大きくなるばかりが現状でありました。そして今回の「東日本大震災」でその力尽きたものと考えざるをえません。

この大震災以降、桃源院護持会は「護持会総会」において、専門家の意見も聞きながら、多くの議論をされて来たものと思います。それを受けて、桃源院役員会は護持会役員および檀信徒のみなさまへ、この際、新築による補修が最良とお願いして参る方針を決断いたしました。古い物事をあらためて新しくすることを鼎新と言いますが、これはちょうど鼎の足が三本であるように、仏祖の冥助と、桃源院の責任・護持会役員と、檀信徒の信心との三つが調和し和合するときこの事業は完成します。

ただただ木の香もかぐわしい新しい本堂で落慶法要が行われることを祈念するものであります。

合掌

